

第十二回

富山の洞に畜生菩提心を發す  
流水に浜て神童未來果を説く

濁世煩惱色欲界、誰か五塵の火宅を脱れん。祇園精舎の鐘の聲は、諸行无常の響あれども、飽まで色を好むものは、後朝の別れを惜むが故に、只これをしも響とし惜り。沙羅雙樹の花の色は、盛者必衰の理りを顯せども、徒に香を愛るものは、風雨の過なんことを妬むが故に、偏に延年の春を契れり。觀すれば夢の世、觀せざるも亦夢の世に、孰か幻ならざりける。思ひ内にあるものは、龍華の三會に値ふといへども、凡夫出離の直路をしらず。覺て復悟るものは、虎穴龍潭に在りといへども、瑜伽成就の快樂夢かり。斯までに世を思ひ捨て、富山の奥に二とせの、春とし秋を送るかな。

初も里見治部大輔義實のおん息女伏姫は、親の為、又國の為に、言の信を黎民に、失はせじと身を捨て、八房の犬に伴れ、山道を指て入日成、隠れし後は人訪す。岸の埴生と山川の、狭山の洞に眞管敷、臥房定めつ冬籠り、春去來れは朝鳥の、友呼ぶ頃は八重霞、高峯の花を見つゝおもふ、弥生は里の難遊び、垂髪少女が水鴨成、二人双居今朝ぞ摘む、名もなつかしき母子草、誰搗そめし三かの日の、餅にあらぬ菱形の、尻掛石も膚ふれて、稍暖き苔衣、脱かえねども、夏の夜の、袂涼しき松風に、梳らして夕立の、雨に洗ふて乾す髪、の、蓬が下に鳴虫の、秋としなれば色々、谷のみみち葉織映し、錦の床も假染の、宿としらでや鹿ぞ鳴く、水澤の時雨霽間なき、果は其処ともじら雪に、岩がね杖角とれて、真木も正木も花ぞさく、四時の眺望はありながら、わびしく處れば鹿自物、膝折布て外に立す、後の世の為とばかりに、經文読誦書写の功、日数積ればづき事も、憂に馴つゝ憂しとせず、浮世の事は聞しらぬ、鳥の音獸の聲さへに、一念希求の友となる、心操こそ殊勝なれ。

是より先八房は、伏姫を背に乗て、この山に入りしとき、廣き流水を帯にしたる、山峽に洞ありけり。石門おのづから鑿もて彫れるごとく、松柏西北に聳て牆をなせり。この洞南面にして、その裡も亦闇からず。犬はこゝに住りて、前足折て伏にければ、姫うへはその意を曉りて、徐にをり立て見給ふに、昔も住たる人やありけん、裡には断離たる圓坐と、焼捨たる灰、はつかに残れり。「世を捨つ、世に捨られて、この山に、山こもりしつるもの、わが身ひとつにあらざりき」とひとりこちて進み入り、そが儘に坐を占給へば、大は姫の傍にをり。滝田の館を出るとき、法華經八軸と、料紙硯は身を放さず、此処までも持來給へば、この夜は月下に読經して、おぼつかなくも明し給ふ。彼感得せし水晶の珠数は、掛て今なほ襟にあり。憑む所は神佛の擁護のみ。人の言語を大

かたならず、聞わざつらんと思へども、もこの畜生われを賺して、深山の奥へ伴ひ來つる状。さ  
らずとも、情欲の、不覺に發ることあらば、遂にはじめの誓ひを忘れん。姪心を扱みて、わが  
身に近づくことあらば、主を欺くの罪渠にあり。只一ト刀に刺殺さんと思ひ決てはうち騷く胸を  
鎮て潜やかに、護身刀の袋の緒を、解捨て右手へ引著て、又誦經してをします。その気色をや知  
たりけん、八房は近くも得よらず、只惚々と姫の顔を、臥て見つ、又起て見つ、舌を吐、涎を流し、  
或は毛を刮り、鼻を刮り、只喘ぐこと頻り也。かくまもりつめて明しつ。

その旦八房はとく起て谷下り、木果蕨根を采て、銜もて來て、姫君にぞまゐらする。恁地  
するに、一日も懈らず、けふと暮て、翌と明して、百日あまり經る程に、八房はいつとなく、誦經  
の声に耳を傾け、心を澄せるものごとく、復姫つゝを嘗さず。伏姫思ひ給ふやう、彼關寺の牛仏  
は、載て栄花物語、筆の月の巻に在り。いはんや又大の梵音を歡へる事、古き草紙に夥見ゆめり。  
佛の慈悲は、穢土穢物を嫌ひ給はず。されば天飛ぶ鳥、地を走る獸、草葉に聚く虫、江河の鱗介  
まで、悉皆成佛せざることなし。今この大が欲を忘れて、誦經の声を聴くを樂み、如々入歸の友  
となる事、皆おん縁の威力によれり。併、穢き時に、吾儕のすくせを示させ給ひし、役行者の  
冥助にこそ、と最、忝く思ひとりて、いよ、誦經を念り給はず。旦にはかの珠数をおし採て、通  
に洲崎の方に祈念し、又あるときは、父母のおん為に、縁の偈文を謄写して、前なる山川におし流  
し、着は花を手折て、佛に手向奉り、秋は入る月に囀て、坐に西天を戀めり。されば山果膝に  
落て朝三の食、秋風に飽き、柴火爐に宿りて、夜薄の衣、寒氣を防ぐ。仄歩山嶮けれども、蕨を  
首陽に折るの怨なく、岩窓に梅遅けれども、嫁て胡語を学ぶの悲みなし。姫はおん年二十に満す、  
容顏固より玉を欺く、巫山の神女が雲となりし、夢の面影を留め、小野小町が花に比し、歌の風情  
を残せり。金屋の内、鶏障の下に、養れ給ひし日は、更にもいはず、今山居久しうなりて、衣裳  
は垢つき破れたれども、肌膚は残雪より皓く、雲鬢、梳るに由なけれども、緑鬢、春花より  
芳し。細腰いよ、瘦て、風に堪ゆる柳のごとく、玉指ます、細りて、色に溢る菊に似たり。そ  
の素性をいふときは、安房の國主、里見氏の嫡女たり。心操を論へば、横佩のおん息女、中將姫  
にも愧ることなし。草書、又讀書ことは、おん父の才を禀て、おのつから理義に伶俐く、刺縫又  
管絃は、母君の手に習せられて、その調いと妙也。かくまで愛たき未通女にてましますに、いかな  
れば月下翁に妬れて、非類の八房に伴れ、よに羨ましくなりゆき給へる。なほ精細に、写し出さ  
んとするに、筆洗り心痛り。當時の光景想像るべし。

なる程にその年は暮て、岸の小草漸萌出、谷の樹芽も翠をます比、有一日伏姫は、硯に水を滴ん

とて、出て石澗を掬給ふに、横走せし止水に、うつるわが影を見給へば、その體は人にして、頭は正しく犬なりけり。思ひかけねは堪ぬばかりに、吐嗟と叫びてはしり退きつ。又立よりて見給ふに、その影われに異なることなし。こはわが心の惑ひなりけん。可惜膽つぶしにけり、と思ひかへして、仏の名号を唱つゝ、この日は經文を書写して給ふに、胸膈くるほしくて、次の日も心地例ならず。この比よりして又月水を絶て見ることなし。月日やうつやく累るまんに、膈張て堪がたし。こは脹滿などいふものにやあらん。とく死ねかしく、と思ひ給ふに、さもなくて、春は着れ、夏過ていと悲しき秋にぞなりぬ。儂れは、去年のこの月、瀧田の館を出たりき。身の病著に思ひくらくへて、只痛しきは母うへせ。泣つゝ送りおくれし、おん面影のみ目に添て、苜れんとするに苜られず、母うへも如此ぞをはしますらん。かへらぬことをかへすゝも、思ひつゞけ思ひ細りて、病わづらひ給はずや。家尊の君、家弟義成、いとなつかしく思ふのみ。おなじ國、おなじ郡に在ながら、里遠離る山鶏の、雌雄にはあらぬ親同胞、峯上隔て影をだに、見るよしもなき別離、昔強面ものは、蛙蛉の、命にこそ、と思ふ事、胸にあまりつゝ、百傳ぶ、若に額をおし當て、「声よ」と泣給ふ。且して目を拭ひ、噫、怒り、愚癡なりき。棄恩入無為報恩者、と仏は説せ給ふなる。恩愛別離のかなしみも、不二要門の意樂に換んや。かうなる事はみな親のおん為なるになつかしと思ひ奉るは罪ぶかゝり。三世の諸佛ゆるさせ給へ。八房は求食かねてや、嚮に出ていまだかへらず。渠わが為に食を求て、獲ざるときはかへり來す。吾儕亦御佛に、仕るこゝろ念んや。露にはそぼつ比ながら、深山は草の花も稀也。索て手向奉らん。とひとりこちつゝやうやくに、いと重やかなる身を起し、流水にそふて綜麻形の、林がもとの菊の花、手折んとぞ、二三町、裳濡らして進み給ふ。

治処に乾なる、重山の根方に當りて、笛の音幽に聞えけり。伏姫耳を側て、あやしやこの山には、樵夫も入らず、山児も住ひせず、わがこの処へ來つる日より、きのふまでもけふ迄も、人にあふことなかりしに、思ひがけなく笛の音の、こなたを指て聞ゆるは、草刈ものゝ迷ひ入りしか。さざすは魔魅山鬼が障礙して、わが道心を試すにやあらんずらん。とてもかくても捨たる身なり。何はゞかりて逃隱るべき。且そのやうを見はやとて、そなたに向て立給ふ。笛はますゝ吹澄して、あちかくなるまんに、と見れば一個の菊童、その年は十三なるべし。腰には鎌と鏡を挿、鞍には両箇の籠を掛、手に一箇の笛を拿り、黒き襦に尻を懸て、林間を出てあゆませ來つ、伏姫を尻目に懸て、なほ草笛の音をとどめず。牛を流水に逐入れて、涉さんとする程に、伏姫は忙しく、「こやゝ」と呼かへし、「そなたはいづれの里の子ぞ。人迹絶たるこの深山路へ、ひとり來るだもこゝ

る得がたきに、路に熟たるものゝ如し。吾侪をしるや」と問給へば、童子は莞尔とうち笑みて、しづかに笛を襟に挿し、「われ何でぶ認せらん。おん身還われを識らず。人のうへ我うへを、今詳に告まつさずは、誰か亦おん身がために、この疑を解ものあるべき。抑この山は、樵夫獨夫いへばさらせ、旅ゆくものも稀に越れど、おん父君義實朝臣、おん身が人に見られんことを、恥かぢやかしく思食、去年よりしてこの山へ、人の入ることを許給はず。こゝをもて人迹絶たり。しかはあれどもおん母君は、只なつかしく思食、姫の安否を訪へかして、専女姪母等いく遍か、密使に立られたれども、はじめ蛭崎十郎が、殿の仰を養ひ、しのびておん身を送りしとき、この山川に溺れて死せり。これにおそれて後々まで、渉すものなき故に、密使はいたづらに、あなたの岸よりかへるのみ、おん身の安否をしるに由なし。是も亦天なり時也。

さてわがうへを告まつさん。われは只牛馬の為に、なるものに候はず。わが師はこの山の麓に在り、又あるときは洲崎にあり。その壽幾百歳なるをしらす。常には人の疾病を療治し、又賣つて生活とし給へり。もし藥劑を投るときは、死を救ひ、壽を保しめ、萬病治せずといふことなし。又書を采ときは、未然を察し、既往を

【挿絵】「草花をたづねて伏姫神童にあふ」「伏姫

童にす。百事申らすといふことなし。けふはわれ師の命を冀て、藥を探らん為に來れり。寔にこの山は、人の往還禁断なれども、程遠からず舊のこゝとく、山拵を許さるべし。わが師これをするゆゑに、藥を探し給ふ」といふ。伏姫聞て嘆息し、「現二親のおん慈悲ばかり、月日と共に照さぬ限なし。身を穢されず潔く、かくてをるとも知召ねば、如此計はせ給ひけん。さればとて、わが身ひとつの故をもて、蛭崎輝武に溺死させ、樵夫幸雄に生活の便著を喪するのみならず、旅ゆくものゝ足さへに、駐るは罪ふかゝり。許させたまへ」といひかけて、うち酸鼻給ひけり。

且して又童子に對ひ、「そなたは名醫に仕るといへば、人の疾病を診ることも、さぞおとなびてあらんずらん。今試みに問べき事あり。吾侪この春の比より、絶て月水を見ず、胸くるほしく煩しく、月々に身はおもくなりぬ。こは何といふ病症ならん」と問せ給へばうち微笑し、「婦人経行閉塞て、後一兩月、悪心して酸きものを好む。俗にこれを悪阻といふ。三四月にして、その腹既に大きく、五个月にしてその子稍動くことあり。婦人おのゝこれをしれり。これらは医に問ふまでもなし。おん身は既に懷妊して、五六个月に及び給へり。何の疑ひあるべき」といふを伏姫聞あへず、「ませたることをいふものかな。吾侪に良人はなきぞかし。去歳のこの月この山に、入りにし日より人を見ず。一念称名読經の外は、他事なきものを、何によりて有身るべき。あな嗚呼

しや」と堪かねて、思はずほとと笑ひ給へば、童子はうち見て冷笑ひ、「なでふおん身に夫ながらん。既に親より許されたる、八房はこれ何ものぞ」と詰れば姫は貌を改め、「そなたは只その初を知て、その後の事してらざるよ。云云の故ありて、二親も得禁め給はず、よに浅ましく家犬と、共に深山に月日を送れど、おん經の擁護によりて、幸に身を穢されず、渠も亦おん經を、聴くことをのみ觀へり。縦證據はなしといふとも、わが身は清し潔し。神こそしらせ給はんに、なぞや非類の八房ゆゑに、身おもくなりしなどとは、聞もつとまじ、穢はし。よしなき童に物いひかけて、悔かりき」と腹立て、うち涙くみ給ふになん。童子はます、うち笑ひ、「われはよく診るところあり、又精細にござるよしあり。おん身こそその一を知て、いまだその二を知らざるなり。さらば惑ひを釋まぬらせん。夫物類相感の玄妙なるは、只凡智をもて測るべからず。譬は火をとるものは、石と金也。しかれども檜樹のときは、友木の相倚るをもて、亦その中より火を出せり。又鳩の糞、年を経て、積こと夥なれば、火もえ出。これらは是に理外の理なり。物は陰陽相感せざれば、絶て子を生ごとなし。但草木は非情にして、松竹に雌雄の名あり。さはれ交媾るものにあらず、これらも亦よく子を結べり。加以、鶴は千歳にして尾らず、相見てよく孕むことあり。かゝる故に、秋土は毀らずして、神遊び、春女は嫁すして懐孕り。聞すや唐山楚王の妃は、常に鐵の柱に倚ることを歡ひて、遂に鉄丸を産しかば、干將莫邪劍に作れり。我邦近江なる賤婦は、人に糞聚を押することを歡ひて、竟に腕を産しかば、手孕村の名を遣せり。皆是物類相感して致すところ、只目前の理をもて推べからず。おん身が懐胎し給ふも、この類なるものを、何疑ひの侍るべき。おん身は真に犯され給はず。八房も亦今は欲なし。しかれども、おん身既に渠に許して、この山中に伴れ、渠も亦おん身を獲て、ころにおのが妻とおもへり。渠はおん身を愛る故に、その經を聴くことを歡び、おん身は渠が帰依する所、われに等しきをもて憐み給ふ。この情既に相感ず、相倚ることなしといふとも、なぞ身おもくならざるべき。われつらゝ相するに、胎内なるは八子ならん。しかはあれども、感ずるところ実ならず、虚々相偶て生ゆるに、その子全く體作らず。かたち作らずしてころに生れ、生れて後に又生れん。是宿因の致す所、善果の成る所也。因とは何ぞや。譬は八房が前身は、その性僻る婦人也。渠はおん父義實朝臣を、怒ることあるをもて、冤魂一隻の犬となりて、おん身親子を辱しむ。是則宿因なり。果とは何ぞや。八房既におん身を獲て、遂におん身を犯すことなく、法華經誦誦の功德によりて、やうやくにその夙怨を散し、共に菩提心を發すが為に、今この八の子を遣せり。八は則八房の八を象り、又法華經の卷の數なり。夫萬卒はいと得やすく、一將は輒く得がたし。もし後々に至らんに、その子おのゝ智勇

に秀、忠信節操、里見を佐けて、威を八州にかゞやかさば、みな是おん身が賜なり。誰かその母を拙しとせん。是則善果也。抑禍福は、糾る纏の如し。何人が今の禍を見て、後の福ひなるよしをしるべき。世の嘲哂は好憎より起り、物の汚穢は、潔白より成る。しからは誑謗も厭ふに足らず、耻辱も只よく忍ぶべし。隠れたるより、顕れたるなし。螫れるものはかならず出。これも亦自然のみ。犬は懐胎六十日、人は懐胎十月也。人畜その差ありといへども、合してこゝに推ときは、おん身が懐胎六ヶ月、この月にしてその子産れん。その産るゝ時はからずして、親と夫にあひ給はん。是より已前は未來未果也。あまりに言を詳にせば、天機を漏すのおそれあり。わが後に又人ありて、その子のうへをしることあるべし。今はしも是までなり。秋の日影の短きに、長ものがたり嗚呼なりき。さそなわが師のまち給はんに、はやまからん」といひかけて、牛の鼻つら牽かへし、山川へさと逐ひ入れて、洗すと見れば玉かつら、影は狭霧に立籠られて、往方もしらすなりにけり。